

エビデンスに基づく看護大学生の参加型学習プログラムの提案

—つながついて安心プロジェクト—

中村 順子 萩原 麻紀 佐藤美恵子 大高 恵美
阿部 範子 佐々木亮平 木下 彩子 酒井 志保

A new learning program for nursing students to support the elderly in Akita

Yoriko NAKAMURA, Maki OGIWARA, Mieko SATO, Emi OTAKA
Noriko ABE, Ryohei SASAKI, Ayako KINOSHITYA, Shiho SAKAI

要旨：先行研究をもとにして看護大学生の参加型学習プログラムの提案を行った。【つながっていること】【高齢者の自己効力感を支えること】【人生を認め自尊感情を持っていただくこと】という研究から得た知見をもとに、介護福祉学科との共同、学年間の交流、カリキュラム上の位置づけとサークル活動などを考慮して構築した。このプログラムの展開には課題も残されているが、本学が目指す「高齢化に対応する地域看護の展開」ができるように、地域に住む高齢者の理解と具体的地域貢献を目指して、可能なところから試みていくことが必要である。

キーワード：参加型学習プログラム、地域看護、つながる、安心、高齢者

Abstract: Based on two studies concernig elderly people who live in Akita prefecture, we have tried to propose a new learning program for students to participate in. This program is based on partnership with students in the department of care and welfar and cooperation with other year students. Also, this program takes place as part of the formal curriculum as well as club activities. Even though we find some issues there, we suggest stating only part of them because one part of our college's mission is to care for elderly people who live here.

Key words: learning program, elderly people, participation, community nursing

I. はじめに

日本赤十字秋田看護大学（以下「本学」とする）では効果的で質の高い教育プログラムの開発のための教育研究に対する研究活動支援を行っている。看護学部ではその特色として「高齢化に対応した地域看護」ができる看護職の育成を位置づけており、教育プログラムにおいて高齢者の理解は欠かせない。また同短期大学介護福祉学科の学生にとっても高齢者の理解は非常に重要である。更に本学が位置する秋田県は平成22年の国勢調査

において高齢化率29.6%と47都道府県中1位となった¹⁾。看護職・介護職を養成する本学においては、学生が目指す職能に対する教育の観点だけでなく、学生・教員による具体的地域貢献が求められる。

本稿で報告する「つながついて安心プロジェクト」と名づけた教育プログラムは以上のような背景をもとに筆者ら研究チームが提案するものであり参加型学習プログラムである。核家族化の進む現在の学生達の教育の中で、実際に高齢者との

日本赤十字秋田看護大学看護学部看護学科

本研究は平成21年度～22年度日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学プロジェクト教育研究補助を受けて行った。

様々な体験をする機会は少なく、それだけに体験して獲得する知識、磨かれる感性は重要であり、将来の看護活動に資するものであると考える。また、このプログラムは研究で得られた知見をもとに学生の学習内容を構築するものであり、エビデンスに基づく学習プログラムとしての意義があると考えられる。

II. プログラム構築の根拠

このプロジェクトが地域の高齢者のニーズに基づき構築されるために、筆者らはこれに先立って2つの研究を行った^{2) 3)}。それらの結果をもとに、特定高齢者にとっての健康上の安心の要素である【つながっていること】や【高齢者の自己効力感を支えること】【高齢者の人生を認め自尊感情を持ていただくこと】をプログラムの中核に据えた。更に看護学部と介護福祉学科の相互理解と交流、看護の科目の中への位置づけ（実習や演習など）とサークル活動を含むボランティア活動、経験や学習の順序性と継続性等を考慮してプログラムを構築した。

III. プログラムの内容

1. 地域に住む高齢者の理解 [看護1年次・介護福祉学科との共同]

特定高齢者にとっての「健康上の安心」の中核概念として明らかになった【つながっていること】を具体化・行動化すると同時に、学生が高齢者とのコミュニケーションを図り、高齢者を理解する学生参加型学習プログラムを提案する。これを進めるにあたり、看護学部・介護福祉学科相互の学習を通し「高齢者理解」「高齢者とのコミュニケーション力の育成」を行う。

介護福祉基礎教育を受け卒業年となっている介護福祉学科2年次が看護・介護基礎教育初学者である看護学部1年次と介護福祉学科1年次を対象に交流学習を行う。将来、「ケアをする人」となることを目指し学習をしている学生同士が他者から学ぶものは大きいと考える。更に看護・介護の共通点と特徴に関しての相互理解が進むことで、将来の協働者としての自覚を促すこととなる。介護を必要とする人の自立、自己実現を支援できる能力を養うことを教育目標の一つとして掲げられている介護福祉学科の学生は、「発達と老化の理解」等の学習を通し高齢者理解にとどまらず、生活支援技術やコミュニケーション技術を学習している。

2年次後期までにはそれらを実践するべく介護実習もほぼ終了している。一方、看護学部1年次は、一般教養と形態機能学やフィジカルアセスメント等を主に、高齢者に関する専門分野は1年次後期からである。介護福祉学科2年次のそれまでの学習と経験を看護学部・介護福祉学科1年次に伝達することにより、同じ立場の学生が自分たちの目で捉えたことを生き生きと体感できると考える。

前学期後半または後期、介護福祉学科2年次による看護学部・介護福祉学科1年次への講義、その後両学科の対象学年合同の小グループになり、事例を通した「高齢者理解」のためのディスカッションを行う。この学習により、高齢者に対するコミュニケーション技術も学習できるものと思われる。1年次の「地域に住む高齢者の理解」においては健康のレベルは問わない。

2. 対象理解（療養支援、障がいを持っている人）[看護2年次]

看護学部の学生達は、1年次の後半にこれから看護を学ぶ上で基盤となっていく、病院で入院している方の対象理解を基礎看護学領域の実習において行う。その時には、既に各看護学領域での概論等が開始されており、いわゆる患者の発達段階の特徴をふまえて看護を考える基礎は学んでいる。2年次には地域看護学概論や在宅看護論が開始となり、地域で生活をする方へと看護の対象は広がっていく。しかし、実際の実習は他の領域と同様に3年次後期から開始となるため、知識として理解できていても、地域で生活する幅広い年齢層、あらゆる健康レベルへの支援はイメージがつきにくいと思われる。また、実際の実習は、地域看護学実習で2週間、在宅看護論実習で2週間のため、その期間で対象を理解し、支援までを行うことになる。

地域での対象、特に秋田県は全国1位の高齢化率と高齢社会を代表する県であり、安心して高齢者が地域で生活できるように支援することが重要となってくる。地域で生活する高齢者を理解する実習をワンクッション入れることで、より3年次の実習期間内での学びを深めることにもつながると考える。時期としては、2年次後期開始の時期とし、地域の特別養護老人ホームや老人保健施設、グループホーム、高齢者優良住宅等の施設に入所している高齢者、また、地域の大型スーパー等に健康相談に来ている高齢者や事業団の検診へ来ている高齢者等、様々な対象と1日関わりを持って

くる。その後、地域で生活する高齢者の対象理解、私達看護者はどのように支えていくことができるのかのディスカッションを行う。そこからの学びを援助論の演習や方法論、そして3年次の実習へとつなげることで、患者や療養者だけでなく、地域で生活する高齢者の「健康上の安心」を支えるということを学習できると考える。

3. 健康教育や健康相談（演習）[看護3年次]

地域における自治会単位もしくは学校単位で継続して、学生による予防をテーマの中心とした健康教育を実施する。このことにより、地域と大学、大学と他教育機関等とのつながりが生まれ、世代間交流も含めた相互理解と、学生自身の地域を知り、感じる力の向上が期待できる。看護学部の学生は保健師資格を得る学生たちであり、地域看護学実習期間だけでなく、継続的な健康教育の場を地域で得ることは学生の実践力の強化につながる。

また、地域行事・事業等の機会とタイアップし、血圧測定を兼ねた健康相談のブースを設け、地域と大学のつながりの場として発信していく。これにより、大学の理解が進むだけでなく、学生が地域の方々と直接対話し、生活モデルの視点から住民のニーズや強みを捉え、アセスメントする力の向上が期待できる。健康教育では対象を広げ、高齢者に限定しない。

1) 健康教育対象

- ①上北手地域内における自治会（地域住民）
- ②上北手保育所、上北手小学校、秋田県医療療育センター乳幼児通園の園児と保護者、きらり支援学校の児童・生徒と保護者等

2) 健康教育内容

- ①学生でも実施できる健康教育の実施
例) 転倒予防、検診（健診）勧奨、正しい生活習慣、正しい手洗い方法等

3) 健康相談対象

- ①上北手地区における地域住民

4) 健康相談内容

- ①地区運動会やお祭りなど地域行事と共催する形で、健康相談コーナーを設置
例) 9月の上北手地区運動会で血圧測定コーナー（テント）を設置等

5) 実施時期

- ①3年次前期から開始し健康教育・健康相談ともに、年数回程度から始める。

4. 地域におけるプライマリーサポーター（家庭訪問によるボランティア支援）[看護1～4年

次・介護福祉学科共同]

地域における自治会と協力し、通年で健康及び生活に関するサポーターとして継続して活動を行う。学生は全学年、両学科混合でチームを組み、家庭訪問等を行いながら地域住民の生活を支える活動を行う。そのことにより、大学の強みを活かした地域との連携が可能となり、年数を重ねることで地域における社会資源としての位置づけが期待できるとともに、学生間における他学年との交流にもつながり、下級生にとって上級生はよいモデルとして、その後の学生生活の意識向上が期待できる。

1) 対象

上北手地区における地域住民

2) 内容

「(仮称) 今月のお手伝いカレンダー」を作成し、事前に協力可能な日程を自治会へ連絡しておき、当日、対応できる学生が依頼の有無に限らず地域に出ていき活動を行う。

(※電球の取り換えや雪かきといった生活に関することから、安全パトロール、話し相手等、内容はさまざまあると予想されるため、民生委員や地区組織との事前の十分な話し合いが必要)

3) 実施時期全学年、年数回程度からスタートする。

連絡ノートを作成し、個人情報に十分配慮しながら、継続して関わることのできる工夫を行う

5. 聞き書きボランティア [看護1～4年次・介護福祉学科共同]

聞き書きとは、人生の先輩である高齢者から人生を語っていただき、思いを引き出しながら語り口を活かして記録に残すものである。これは、単に話を聞くという行為ではなく、聞き手と語り手との相互の信頼関係を大切にすることである。

語り手である高齢者は、今までの自分の人生を語り、様々な体験を振り返ることで、生きる力や人生の意義を見いだすことができる。特定高齢者における健康上の安心の中核であった【つながっていること】のカテゴリーの一つ、[がんばってきた自分を認めることができる]ことは、《人生を認めあえる》ことでもあり、語ることで自分自身の人生を肯定的に受け止め、自己肯定感や自尊感情を高める効果が期待できる。

聞き手である学生は、数回足を運び高齢者との

信頼関係を築いていく。そして人生を語っていただき、思いを引き出しながら書き留めるという体験をする。このことは、聞き書きボランティアというツールを活用し、「高齢者との関わりを通じたコミュニケーション力や人間関係形成力の育成」、「高齢者の理解」や「高齢者の人生に触れることで涵養される人格の形成」を学ぶことができる。また、学生が地域に出て活動していくことで、高齢者の体験や生活の知恵を学ぶといった世代間の交流が可能であり、関連機関と連携した地域貢献も可能である。

聞き書きボランティアの活動は全学生が実施可

能であるが、実施に当たっては講師を招いて「聞き書きボランティアの育成講座」を開催し、受講生の中から「日赤聞き書き隊（仮）」を結成し活動を行う。継続的に実施していけるよう、サークルやゼミナール、ボランティア活動論を受講した学生などカリキュラムとの兼ね合いを踏まえたシステムを構築していくことも必要である。

6. 全体の構造

今まで述べたプログラムの内容を構造図にしたものが図1である。看護と介護の交流、学年間の交流、年次による学習内容の位置づけを示している。また各学年の学習内容を表1に示した。

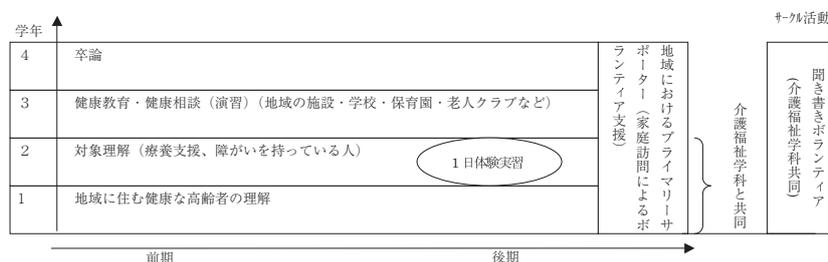


図1 「つながって安心プロジェクト」学習プログラム

表1 「つながって安心プロジェクト」学習プログラム

学習プログラム	看護学科				介護福祉学科と共同
	1学年	2学年	3学年	4学年	
1. 地域に住む健康な高齢者の理解	○				○
2. 対象理解（療養支援、障がいを持っている人）		○			
3. 健康教育や健康相談（演習）				○	
4. 地域におけるプライマリ・サポーター（家庭訪問によるボランティア支援）	○	○	○	○	○
5. 聞き書きボランティア	○	○	○	○	○

IV. プログラム展開上の課題

学生の高齢者理解という学習活動と地域の高齢者支援という地域貢献活動の両方を兼ね備えた本プログラムであるが、提案した内容を実際のカリキュラムに位置づけるためにはいくつかの課題がある。1つめは新しいコンセプトで大学のカリキュラム構造全体を考える必要性である。看護系大学では大学の教育理念をもとに看護の概念をカリキュラム上にどのように位置づけるか検討し、従来の縦割りの科目立てとは異なるカリキュラムを構築するところが見られるようになった^{4) 5)}。本プログラムを従来の科目（老年看護学や在宅看護論など）の中だけで展開することは時間的また内容的な無理が生じるのではないかと考えられる。「健康のレベルの有無に関わらず、老年期にある

方を看護の対象としてだけでなく人間として理解する」ことを展開できる新たな枠組みのカリキュラムの考え方がそこには求められるのではないだろうか。更に定員数が1学年100人の本学において、このようなプログラムを展開するには、全員が一度に動く状況では非常に難しい。1学年を2クラス程度に分けるなどの工夫が求められる。

2つめは教員の理解である。1つめの課題にも通じる場所であるが、本学の教育理念をもとに柔軟な考え方でカリキュラムを展開する、プログラムを遂行するという共通理解が教員間になれば、全学的に動く必要のある本プログラムの実践は難しいであろう。更に、高齢者だけが看護の対象ではないが、高齢者という人生の先輩を理解しようとするのが看護の基本的な姿勢を学ぶこと

につながるという共通理解を持っていることも重要であると思われる。

3つ目は地域の理解である。学生や教員による地域貢献と言っても、実際には学生がその中で学ぶことが中心となるであろう。地域全体でこれからの人材を育ててもらいたいこと、そのための場の提供をお願いしたいことなどを、時間を使いながら理解していただくように努め、地域の大学であることを大学側だけでなく地域にも認知していただく必要がある。

V. おわりに

平成22年度から2年間プロジェクト教育研究の助成のもとに、エビデンスを基にした参加型学習プログラムの構築の研究と検討を行ってきた。本稿で提案した学習プログラムが全て実現するには既に述べたようなカリキュラム構造全体に対する見直しも必要であると思われる。それについては今後長い時間をかけて教員全体で検討して行くべきことと考える。しかし例えば聞き書きボランティアの養成のように単発でできるものもあり、既にサークル立ち上げの動きもある。この地域の大学であることを認識し、地域貢献を念頭に置きつつ高齢者理解を進めて行くことは今後の本学には必ず求められることであることを考慮すると、どのような部分からでもこのような学習プログラムの試みはできるのではないだろうか。学生が人間理解力を高め、看護実践者としてふさわしい態度を見につけることができることを念頭に置きつつ、効果的な教育方法やプログラムの開発は今後も引き続き行って行きたいものである。

文献

1. 平成22年国勢調査結果, 総務省統計局ホームページ
<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2010/index.htm#a02>
 2011年11月14日検索
2. 中村順子, 木下彩子, 阿部範子, 酒井志保, 大高恵美, 佐藤美恵子, 他. C市の特定高齢者にとって健康上の安心とは. 日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学紀要2009; 14: 9-16
3. 中村順子, 木下彩子, 大高恵美, 佐藤美恵子, 阿部範子, 荻原麻紀, 他. 東北地方B県の特定高齢者にとっての健康上の安心. 日本公衆衛生雑誌 2011; 58(10): 275
4. 菱沼典子, 小山真理子, 小島操子, 常葉恵子, 香春知永, 宮坂義彦他. 聖路加看護大学1995年度改定カリキュラムについて. 聖路加看護大学紀要 1996; 22: 113-121
5. 宮崎美砂子, 山本利江. 学士課程看護基礎教育のカリキュラム改革. 千葉大学看護学部紀要2007; 29: 49-54